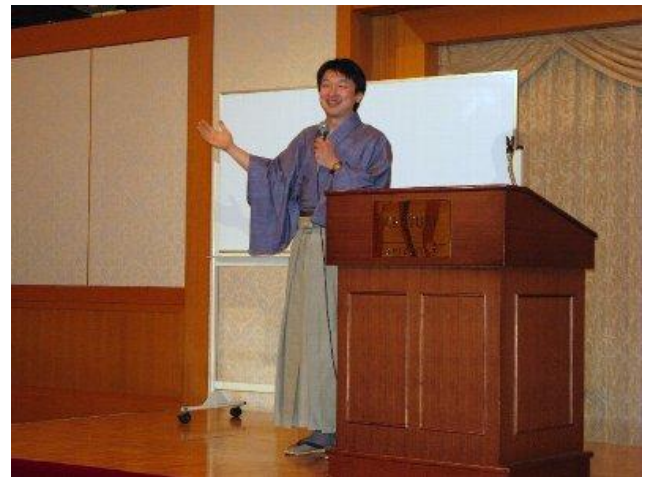


# ウッディチキン／静岡例会

## 『例会レポート64』

日	程	:	2011年7月6日(水)
会	場	:	<b>ホテルセンチュリー静岡</b> 〒422-8575 静岡県静岡市駿河区南町 18-1 Tel. 054-284-0111 ホームページ <a href="http://www.centuryshizuoka.co.jp/">http://www.centuryshizuoka.co.jp/</a>
参加者数	:	講習会=約90名	
講演会内容	:	<b>PM7:00~9:35</b> ・ウッディチキン静岡支部代表 山内淳氏挨拶 ・ウッディチキン代表 伊藤豊氏挨拶 ・炭焼き職人 原伸介氏講演	
親睦二次会	:	PM10:15~12:00 約70名	



レポート作成



NPO法人ウッディチキン総事務局  
谷口 隆



<http://woodychicken.com> [info@woodychicken.com](mailto:info@woodychicken.com)

<実行委員会>



<受付>



<リストバンド販売>



<写真展示>



## < 開会挨拶 >

### ●司会進行

- ・本日の進行役は、a s i l e 手塚浩孝氏です。

### < 静岡支部代表／山内氏挨拶 >

### ●仲間

- ・仲間がいることは大切なことです。
- ・今日は、伊藤先生の挨拶に続き、信州の炭焼き職人、原伸介さんをお招きし講演して頂きます。
- ・では、よろしくお願いします。



### < ウッディチキン代表 伊藤豊氏挨拶 >

### ●実行委員会からの報告

- ・先ほど実行委員会を開催し、来年度の例会日程、サマーカレッジ開催、決算報告、100キロウォーク、東日本大震災への支援などについて話し合いました。

### ●震災支援

- ・入り口で、支援リストバンドの販売もしていますのでご協力下さい。
- ・会場の後方には、アジアチャイルドサポートから送られてきた震災写真パネルも展示しています。
- ・震災支援はこれからも続けていきますので、皆さんの協力を宜しくお願いします。



## 【 炭焼き職人 原伸介氏 講演会 】

### 1. 高校生まで

- ・1972年の横浜生まれで、現在38歳です。
- ・長野県の松本に住んでいます。
- ・横須賀に住んでいるときの家の裏山（裏山）が自分の原点です。
- ・裏山が好きで好きで、小学校の時毎日そこで遊んでいました。
- ・中学2年の時にその裏山が開発されて、学校が出来てしまいました。
- ・私もその学校に移りました。
- ・好きだった裏山に対し、何も出来ない自分に腹が立ちました。
- ・そして横須賀高校に入学しました。
- ・進路を決める時に、希望の職、大学を書くように言われました。
- ・その時、自分は以前から山で生きている人になりたいということで「仙人」と書いたところ、先生に叱られました。

### 2. 大学の時

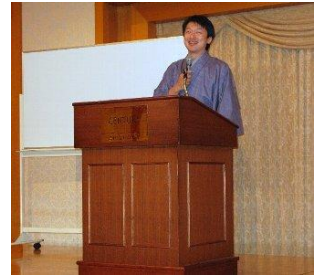
- ・今は、冬、山に入って炭を焼く仕事をしています。
- ・自分は、自分のことを平成の仙人と思っています。
- ・「夢は叶う」ということを言いたいです。
- ・信州大学農学部森林科学科に入りましたが、自分の思ったような校外での活動はしなくて大学内だけの実習・勉強だったので、行かなくなりました。
- ・学内だけでやっているのではちっちゃい人間になってしまうと思い、もっとデッカイところに行きたくて、北海道へ行きました。
- ・そして、ある地方の祭りがあったので、出店の場所をとりました。
- ・たまたま隣に来た兄さんが、信州大学の同学部の先輩とわかりビックリする出会いがありました。
- ・その先輩の仕事はキコリでした。



- ・森林組合で木の伐採をしている人だったのです。
- ・自分はその頃、山に対して夢を捨てていました。
- ・その先輩から「仕事が楽しければ人生が楽しくなる。週の7分の5が仕事だ。嫌々なら駄目だ。仕事は人生そのものだから。」と教えられました。
- ・14歳の時に裏山に恩返しをしようと思っていたのですが、それが出来ておらず、恥ずかしいなと思いました。
- ・自分は現場のことを何も知らず、「よし、現場に出よう！」と思いました。

### 3. 師匠に会う

- ・アルバイトをしながら現場の師匠を探しました。
- ・中華料理屋のバイトの休憩時間にローカル新聞を見た時に、「山が好きだ」という記事があったので、家に帰ってすぐにそこに電話しました。
- ・そして、一目おじいさんに会いたいと思い、近く四賀村に住んでいるところまで会いに行きました。
- ・私は小さい頃から生意気で、話を最後まで聞いてもらったことがありませんでした。
- ・そのおじいさんは違いました。私の想いを最後まで黙って聞いてくれました。
- ・その人は器が違うと感じました。そして、その人を師匠に決めました。
- ・それで、山仕事を教えて下さいと頼みました。
- ・伊沢師匠（当時69歳）、自分は22歳でした。



### 4. 師匠へのあこがれ

- ・山のことは何も知らず、ゼロからのスタートでした。
- ・炭にするための原木を切るのに出来ないと思われるのが悔しくて、見つからないように朝練を繰り返し1年間修行しました。
- ・その時も、炭焼き修行はお金にならないので、松本に帰ってバイトを続けていました。
- ・そんな生活が凄くしんどくて、修行をやめるか独立するか、ゼロか100のどちらを取るのかと思っていました。
- ・元々仙人になりたくて伊沢師匠の弟子になったのですが、炭焼き職人になりたかったわけではなく、師匠を追いかけたい内に炭焼き職人になってしまったのです。
- ・師匠は3年前に亡くなりました。
- ・師匠は大正生まれの人で、そんな方に直接仕事を教えて頂いてどれだけ幸せかと思いました。
- ・条件だけで人は動かないと思います。その一つが「あこがれの力」だと思います。
- ・師匠は「あこがれ」そのものでした。
- ・自分があこがれられても大丈夫な存在になることが全てだと思います。
- ・お金がもらえない、しんどい、でも付いていく・・・それが「あこがれの力」です。
- ・師匠は「山では塩さえあれば生き伸びていける」と言いました。格好いいと思いました。
- ・師匠には「山では1万円札をかじって生活は出来ないが、智慧と技術があれば生きていける」と教えられました。
- ・自分は、伊沢師匠のことを後世に伝える役目があると思っています

### 5. 独立準備

- ・独立しようと思って山を探していると、以前の裏山に似た山を見つけました。
- ・すぐに電話しましたが話しにならなくて、次は山主さんに手紙を書きました。が、返事は来ませんでした。次は炭の現物を送りつけました。
- ・その頃はラーメン屋のアルバイトをしていました。ある日、いつも出前を注文される相馬さんという女性から留守電が入っていました。
- ・それですぐに家に駆けつけました。
- ・そしたら、相馬さんのテーブルの上に、自分が送った手紙や炭が乗っていました。
- ・なんと、手紙を書いた先の山主さんは相馬さんの息子さんだったのです。
- ・相馬さんはこう言いました。「私は、あなたの手紙を読んで感動しました。出前の時、あなたはいつも笑顔を絶やさず、届けてくれるのを私は見ていました。あなたが悪い人でないのを知っているつもりです。だから山はあなたに任せます。」
- ・炭焼きをして、バイトでしんどい顔をしていたらどうなっていたでしょう。
- ・日常の大切さを思い知らされました。
- ・そして、まず道作りから始め、車が入れないところに小屋を作りました。
- ・伊沢師匠と一緒に働いていた山師の人は、「雨の臭いがする」といいます。そしたら、10分後くらいに雨が降ってくるのです。
- ・度を越えた便利さは人を無能にしてしまい、人間本来持っている自然を分る力を無くしてしまうのです。
- ・小屋で仮眠していたら、獣が周囲の草木をガサガサと音を立てる前に目がさめます。
- ・危険を察知して、知らせる感性・本能が事前に働くのです。
- ・DNAは使わないと繊細な感覚が衰え、錆付いてしまうのです。



## 6. 独立の苦勞

- ・そうして独立し、炭を焼いて松本の市内に営業・販売に行きました。しかし、全然売れませんでした。
- ・1日に2000円くらいしか売れず、時給に換算すれば200円程度でした。
- ・こんなことならやっつけられないと思いました。
- ・営業に専念すればいいのですが、炭窯の火は落とせないのです。
- ・炭窯は、質を保つために窯の火を絶やすことが出来ず、一度火を落とすと、次に立ち上げるまで2ヶ月くらい掛かるのです。なので、どんどん木を切って作らないといけなのです。そして、とうとう限界が来てしまいました。
- ・2月半ばの雪が残る底冷えのする日でした。
- ・2~3本、木を切ったところでその切った木の上にへたり込んでしまったのです。
- ・「もう駄目だ！」と思いました。
- ・そしたら不意な声が聞こえました。
- ・幻聴だとは思いますが、私は今でも山の神様の声だと信じています。
- ・「笑え！」
- ・それで、もう笑うしかないと思い、どうにでもなれというやけくそな思いで、無理やり笑いました。
- ・そしたらどんどん可笑しくなり、笑いが止まらなくなり、腹の底から2分間ほど笑い続けました。
- ・そしてふとした瞬間、冷静になり「俺はまだ大丈夫だ！」と思えたのです。
- ・そしたら、劇的に運命が変わりました、炭が売れ始めたのです。
- ・それまで、接客する時、売れないから伝えたい気持ちが大きいほど辛気臭い顔になっていたのです。
- ・それが、笑って吹っ切れた後は、笑顔で話ができるようになっていました。
- ・話を聞いてもらいたいなら、相手を受け容れるのが先です。
- ・人は、自分を受け容れてくれるという人の話しか聞かないのです。
- ・聞いてくれないのは、自分の伝え方が問題なのです。
- ・買ってくれた方には、次に良い炭を届けるのが恩返しと思うようになりました。



## 7. 修行の旅・名人の話

- ・炭が売れるようにはなりませんが、自分はそれだけでは納得がいきませんでした。
- ・それで、名人がいると聞いたら北にも南にも行きました。
- ・個人的な動機で始めたものは止める時も個人的な動機でいじらうと思っていました。
- ・それが間違っていることを岩手県江刺の石川名人（当時76歳）に教えて頂きました。
- ・名人からは秘伝を全て教えてもらいました。
- ・なぜそこまでしてくれるのかなと思っていました。そしたら名人はこう言いました。
- ・「このあたりは昔は本当に炭の産地で賑やかで楽しいものだった。しかし戦後廃れて、とうとうこの地域では最後の一人になってしまった。私は君のような若者が来るのを50年間ずっと待っていたんだよ。」と言われました。
- ・その時に思いました。「これはもう、個人的な動機では済まないぞ」
- ・その瞬間、「重荷を誇りに変えて」（プレッシャーをプライドに変えて）という言葉が降りてきました。
- ・炭焼きは自分一人の問題ではないと感じました。個を超えたのです。
- ・もう一つエピソードがあります。
- ・炭焼きの修行を終えていよいよ独立すると決めて、伊沢師匠に相談しました。
- ・そしたら、車に乗せられて山の奥に行きます。
- ・名人は山の石を拾って説明も無しに私に手渡しました。
- ・そしてまた車に乗って、違うところに行き、ある家の玄関のチャイムを鳴らしました。
- ・腰の曲がったおじいちゃんが出てきました。
- ・伊沢師匠はそのおじいちゃんに石を渡し、「このお兄ちゃんが独立して新しく炭窯を作ることになったんだけど、この石でいいかね。」と聞きました。
- ・そしたらそのおじいちゃんは石をじっと見て、腰を伸ばしてにっこり笑って「まちげえねえ」と言われました。
- ・その人は、伊沢師匠の師匠（90歳以上）だったのです。
- ・考えてみると、その大師匠はまたその前の師匠に教わったわけで、その伝統の最先端に自分がいるんだということが分った瞬間、僕にプライドが生まれました。・・・返してくれた石の重かったこと。
- ・個も個性も大事ですが、それは自己満足だけで終わってしまうのです。
- ・個を超えたものに繋がっているというプライドが大切なのです。周りの役に立ってこそなのです。
- ・九州の宮崎の名人の話です。
- ・その名人は私にこう言いました。「技術はいいものだぞ。技術は火事になっても燃えねえ、盗まれもしない。しかし、どんなに遠くても人様が盗みに来るようになっさりした技術を身に付けなきゃいけねえ。」・・・格好いい！
- ・言い換えると「いつか俺みたいになるんだぞ。」ということです。
- ・30歳までは技術が貯金でした。
- ・モノ作りは最終的には技術を超えて意識です。



## 8. ピンチの時

- ・著書「笑顔は無重力」を書きました。この本は一言で言えば「笑っていれば大丈夫」というテーマでした。
- ・しかし、その本を書き終えた瞬間に、燃え尽き症候群になり、疲れ果て、気が無くなり笑えなくなりました。
- ・だから怖くて人に会えなくなりました。
- ・11月の炭焼きのシーズンになってもやる気が出ませんでした。
- ・肉体は有限ということすら分りませんでした。
- ・腎臓が不調だったのです。それさえプラス思考で乗り越えられると思っていましたが、それは違いました。
- ・ピンチはピンチなのです、それを受け容れて、認識してから乗り越えることが大切です。
- ・それで人生初の引きこもりになってしまいました。その時に多くのことを学びました。
- ・引きこもっていると、ほとんど布団の中にいるので、死んじゃうと思うくらいジメジメします。
- ・少しでも役に立ちたいという思いで、布団を干しました。ついにかみさんの布団も干しました。
- ・かみさんの本業は林業で、大型重機の免許も持っていました。
- ・かみさんは、毎日仕事に行っていました。
- ・仕事から帰ってきたかみさんは「布団干してくれてたんだ。ありがとう。」と言ってくれました。
- ・かみさんは、私のマイナス面を見ず、たった一つ出来たプラス面を褒めてくれました。びっくりしました。
- ・マイナススパイラルの極限は、自分は不用な人間なんだと考えてしまうことです。
- ・しかし、こんな自分でもたった一つのことを褒めて、喜んでもらったということで大変自信になりました。
- ・引きこもりの人がいたら、小さな願いをして、うんと「ありがとう。助かった」と言ってあげてください。
- ・かみさんは、私が引きこもっていても全く何も言わないのです。そうするとこちらは逆に不安になります。
- ・そして私はかみさんに「なんで、何も言わないの？」と聞いてみました。
- ・かみさんはこういいました。「だって、何も期待してないもん」
- ・それを聞いて、力が抜けたというか、逆に救われました。
- ・人に期待していると、相手が思うようにやってくれないとがっかりしますが、期待していないと何もないということに気がきました。
- ・期待値がゼロだから、かみさんは私にありがとうと言えたのです。
- ・完璧な人はいないのでね。
- ・誰だって欠点があります。欠点はあってもいいんです。
- ・それを指摘すると泥仕合になるだけです。誰も幸せにならないのです。
- ・出来たところに感謝することです。
- ・期待しないと喜びの量が俄然増えるのです。

## 9. 母の教育方針

- ・自分がこのようになったのは、引きこもったからではありません。
- ・母の教育は、自分に夢を叶える力を与えてくれました。

### ①「比べない」

- ・自分は他とは違う行動をしていても一度もとがめませんでした。
- ・母は、兄姉と私の3人を比べることもしませんでした。
- ・比べられずに育つとどうなるか・・・自分も人を比べなくなるのです。
- ・比べた先には本当の幸福はないのです。
- ・なぜか・・・それは上には上がいるからです。
- ・人間の素晴らしさって、自分の幸せを自分自身で決めることが出来るところなんです。

### ②「ほめる」

- ・母は「出来るじゃない、出来たじゃない」と褒めてくれました。
- ・否定ばかりでは「どうせ・・・しても出来ないから」となります。
- ・根拠の無い自信が大切なのです。自信に根拠はいらないのです。
- ・まず「できる」と思うことです。「できる」と思うことが先なのです。
- ・この「比べない」と「ほめる」の2つをあわせると、「周りがしていなくても自分には出来るんだ」と思うことが出来るようになります。

## 10. レストランでの出来事

- ・最高の炭を焼くために全国の修行に出かけたのですが、ある日最高の炭が焼けました。
- ・夜中2時、最高の白炭が出来てガッツポーズをやりました。
- ・だけど、俺はこれまで自己満足のために修行してきたのかという疑問が生じ、その場にへたりこんでしまいました。
- ・その瞬間にどうしようと思い、松本市の伊太利亜炭焼き料理「ドマノマ」のシェフに会いに行くことにしました。
- ・レストランの一角に座り、自分の焼いた炭がどのように使われるのか家族連れのお客様を観察しました。
- ・オードブルが出ているときは会話が全然ありませんでした。
- ・その後には焼肉のセルフコースなので長七輪が出てきました。



- ・そしたら、お父さんが張り切って炭奉行になって焼いています。
- ・おばあさんは炭のことには詳しいので、会話が弾んでいます。
- ・それを見ていたら嬉しくて嬉しくて・・・
- ・食事が済み帰られる時、自分も思わずレジまで行き、「ありがとうございます」と声を掛けてしまいました。
- ・私は、「先ほど使って頂いた炭を焼かせて頂いている者です。」と挨拶しました。
- ・おとうさんは満面の笑顔で一言「ありがとう」と言ってくれました。
- ・27歳にして、仕事って何のためにあるのかをそのお父さんに教えて頂きました。
- ・その時、「職人の全ての汗はお客様の笑顔のために！」という言葉が降りてきました。

## 1 1. 3人の大工

- ・3人の大工がいます。
- ・その大工に「何をしているのですか？」と聞きました。
- ・1人目が言います。「角材を運んでいるんだよ。」
- ・2人目が言います。「いい家を建てるためだよ。」
- ・3人目が言います。「家族が幸福に過ごせる場所を造るんだよ。」
- ・自分は、モノばかり見ていました。でも違っていました。
- ・作るものはモノであっても、その先は必ず人に繋がっています。
- ・そこまで想いを馳せることが出来るかどうかです。
- ・仕事に思いやりを持つことが大切です。
- ・全てはお客様に繋がっているのです。



## 1 2. 高校生への講演

- ・5年ほど前、新潟県のある高校に講演で呼んで頂きました。
- ・その講演の主催者は地元のJC青年会議所でした。
- ・燕産業は刃物の町で、工業高校を卒業しても地元に住つかないといひます。
- ・そんな彼らに夢と希望と誇りを持たせる講演をして欲しいということでした。
- ・新しい教頭先生は、生徒を信用しない人でした。
- ・2部構成で、第1部では全校生徒に講演、第2部では自由参加で原伸介と語る会を、ということになりました。
- ・教頭先生は、そんな企画では第2部に一人も行くことはないと言い切ったらしいです。
- ・私はJCの担当者に「任しておいて下さい。」と言い切りました。
- ・私は壇上に上がり、ほとんど下を向いている学生達に向かい、第一声でこう言いました。
- ・「今メール見てる子いるよね」というと、見てる子はハッと顔を上げました。
- ・その瞬間私は「いいよ、いいよ、そのまま続けて！だけでもいいねえな・・・さあ始めます。」と言いました。
- ・そしたら、ずっと顔を上げっぱなしで話を聞いていました。
- ・講演時間1時間、さんざん煽りました。
- ・「燕産業というこの町は、物凄い伝統のある職人さん達の町だ。職人とはどれほど誇らしい仕事か！日本の国力を支えてきたんだ。その未来を担うのは、お前達ではないか！」
- ・スイッチが入って、私はメチャメチャ熱く語りました。
- ・講演が終わって、退出する時に袖にはけるのではなく、会場のセンターをあるいて「いいかみんな、第2部でまってるぞ！」と声を掛けました。
- ・第2部の会場は小さいところを予定していたのですが、大勢が来たので、急遽場所を変えました。
- ・なんと、息のいいの120名が参加しました。
- ・講演が終わって校長室にいと、思いつめた顔の若い先生がやってきました。
- ・そしてこう話してくれました。
- ・「私は、今日、原さんの話を聞いて人生が変わりました。」
- ・「私は、野球部の顧問をしています。実は思い余って、学生を殴ってしまいました。私はそのことが間違っていないと思っておりましたが、今日原さんの話を聞いて間違っていると思いました。」
- ・「初めは野球が好きでやっていましたが、いつの間にか、甲子園に行くことが自分の仕事だと思えるようになっていました。私の考え方は目的と手段が逆になってしまっていると思いました。」
- ・「今日原さんの話を聞く中で、生徒を信じてあげていないことに気付きました。」
- ・「なので、明日から日本一楽しい野球部を作ろうと思います。」、そうおっしゃられたのです。
- ・今まで予選で2回戦までしか進めなかったこの野球部は、2年後甲子園に初出場を決めたという報告をJCの担当者から受けました。
- ・嬉しかったですね。号泣しましたね。
- ・それで、甲子園に応援に行きました。
- ・相手は報徳学園で負けましたが、本当に楽しそうにプレイしていました。
- ・私は、それは理想論だよと言われることもありますが、それを超えて実現してくれるのを見ると、本当に嬉しい限りです。

### 13. 震災

- ・3月11日に発生した東日本大地震の後、すぐに炭を持って宮城県石巻に行きました。
- ・皆は被害が分りやすい方に支援に行くだろうから、私は分りにくい方、つまり放射能は目に見えにくいので福島に応援に行こうと思いました。
- ・原発は、それまではクリーンエネルギーだなんだと言われていたのに、事故に合った途端悪者にされて、かわいそうだと思います。
- ・舎弟のアベちゃんにガイガーカウンターを手に入れてもらい、福島第1原発に向かったところ、2つ検問をくぐり抜けて、なんと現地に到着してしまいました。現地は、その5日後に完全封鎖になりましたが・・・
- ・ガイガーカウンターを持って行ったまでは良かったのですが、数値の見方を知らないのに役に立ちませんでした。
- ・原発がこうなったのも全て人間の問題だし、自分が無関心だったからだと思います。
- ・私はアベちゃんに「具体的に何かできることはあるかな？」と聞きました。
- ・アベちゃんは「何もありません。原発は止まらないし、ただ福島のことを忘れないで下さい。」と言われました。凄くグツとききました。それで、通い続ける決意をしました。
- ・私の人生の師匠である渡辺一夫さんという方が岩瀬郡須賀川市に住んでおられます。
- ・渡辺さんは20年間かけて、25ヘクタールの山をコツコツ手入れして、「響きの森」と名付けて全て開放しています。森の中に舞台を作り、バンドを呼んでコンサートしたり、芝居を見せたりする施設もあります
- ・世界初のバリアフリーのツリーハウスもあります。
- ・渡辺さんは言います。「森は個人のものじゃないんだよ。皆のものなんだよ。」
- ・また、山田恭暉（やまだやすてる）さんという方がおられます。72歳です。
- ・山田さんは、自分が呼び掛け人になって60歳以上の高齢技術者の方を対象とした「炉心特攻隊」を募っています。
- ・山田さんは言います。
- ・原発事故を收拾するためには、今は、誰かが炉心部に入って作業しなければならない状態になっています。
- ・炉心の作業は被曝を恐れて、10～20分の短時間労働での交代制になっています。そんなことでまともな作業が出来るわけがありません。この特攻隊は、この作業を3～4時間継続して行うというものです。
- ・【福島原発暴発阻止行動プロジェクトの記事】を読み上げ（ほぼ上記のような内容でした）
- ・この原発決死隊に応募した人数は、全国でなんと400名を超えています。なんと言う国でしょうか！！
- ・渡辺さんが山田さんのことを知って、すぐに山田さんに電話を掛けました。
- ・渡辺さんは、「うちの『響きの森』だったら心と身体を休めるのには最高の場所です。うちにきて頂ければ、食費から何から全部面倒をみます。」と申し出られたのです。
- ・私もそうなったら後方支援します、何でもしますと申し出ました。
- ・渡辺さんからしばらく電話が無く、一昨日電話が来ました。「来るよ。」
- ・そしていよいよ視察団の5名が来られます。
- ・この方たちを応援するために、「うちわプロジェクト」を始めました。
- ・後ほどロビーに特製の白いうちわを用意していますので、応援メッセージを書いてくだされば嬉しいです。決死隊の皆さんに直接手渡します。
- ・自分は、こういったことを伝えていく役目があると思っています。
- ・直接支援できない場合は、支援者を応援することで良いと考えています。
- ・これからも、応援、支援をよろしくお願い致します。
- ・今日は講演に呼んで頂き、ありがとうございました



ありがとうございました。

### ●今年の定例会開催日程！

8月24～26日（水～金）	サマーカレッジ
9月	<中止> 三重例会は中止になりましたので御注意を！
10月12日（水）	東京
11月 9日（水）	沖縄
12月	<なし>

もっともっと、ソウルメイトの絆を深めていきましょう！